自己語り後の反復的想起

事例に基づく関連要因の探索

野村 晴夫

(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード: 自己語り, 想起, 高齢期

Self-narratives followed by repeated memory recall

Haruo NOMURA

(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Key-words: self-narrative, recall, elder

問題と目的

自分について語る行為(self-narrative: 自己語り)には、過去の経験を組織化し、人生を意味づけるといった対自的機能が提言されてきた。しかし、この提言を検討した研究の多く(e.g., 野村, 2002, 2008)は、自己語りの様態と機能との関連に関する一時点での調査であり、自己語りの機能の直接的な証左は乏しい。一方、調査対象者の生活史を聴取する場面は、調査者にとっては情報収集の調査場面であるが、調査対象者にとっては自己語りを体験する出来事ともなり得る。したがって、自己語り後に、そこで語った内容や状況を思いがけず想起し、語り手に事後的な影響をもたらすこともあるだろう。こうした意図せずして生じる想起、すなわち不随意的想起には、自己語りの機能の発露が見出せるかもしれない。一方、発達段階上、自己語りの機能は、中年期から高齢期に果たす役割が大きいとされる。中年期にはライフコースを折り返す局面で前半生の見直しが、また、高齢期にはライフレビューによる「自我の統合」が発達課題に想定されてきたからである。

そこで本研究では、中年期から高齢期を対象とした生活史調査面接場面から、自己語りの機能の発現に関連する要因を探索することを試みた。その際、要素に解体せず、包括的に探索するために、事例に基づくこととした。

方法

面接法と日誌法(e.g., 神谷(2003), Mace(2007))を併用した。調査対象者は対人ボランティア経験者24名(女性16名, 男性8名。平均年齢60.4歳)であり、調査期間は2011年3月から12月であった。個別面接法によって自己語りを促進・収集した後、日誌法によって不随意的想起を収集した。さらに事後面接によって日誌法の記録内容を補完し、前回面接の影響を探った。自己語りの面接では、調査対象者全員に共通するボランティア経験の内容や参加経緯、動機に加え、それらと関わる生活史を尋ねた。日誌法では、連続する1週間、不随意的な記憶想起を毎日3個まで、携帯するカードに筆記してもらった。記録内容は、想起の状況(日時, 場所, 行為, 契機, 気分)と想起した出来事(時期, 内容)とした。事後面接では、日誌の記録内容の想起頻度と開示頻度も尋ねた。

結果と考察

面接における自己語り後に、そこで語った内容や語った状況を、日誌において反復的に想起した事例を抽出した。語った内容の反復性は、日誌の内容との登場人物や行為の相同性から判断した。以下では、反復性が見られた面接の自己語り、日誌の不随意的想起、および自己語り体験の位置づけの順に、一部の事例を紹介し、関連要因を考察する。

○事例1 親子関係の意味づけの改変(60代女性)

面接では、父親からは何もしてもらわなかったと語っていた。日誌ではそれに反し、父親が出勤前の忙しい中、毎朝幼稚園に送ってくれたことを想起していた。同居家族はいるも、自己語りに類した体験は少なく、かつ不得手としてきた。

○事例2 配偶者死別体験の感情的負荷の軽減(60代女性)

面接では、ボランティア動機の質問に、約10年前の配偶者死別体験を語ったが、時折言葉に詰まり、落涙していた。日誌では、面接とは異なり、思い出しても「ワッとならなくなった」。事後面接では笑顔も見られた。死別した夫については想起することはあっても、人に語ることはなかった。

○事例3 ボランティア活動の意味づけの付加(60代男性)

面接では、ボランティア動機の質問に、若い頃から多様な世役を任されてきたことを語った。日誌では、それに加えて退職後に打ち込める活動を考えての「打算があった」ことに気づく。ふだんから全般に過去を想起することは少なく、自分について語ることは宴席を除き稀であった。

上記事例からは、自己語り後の反復的想起には、自己語りの体験の新奇性が関連している可能性がうかがえる。今後は、開示頻度や想起頻度を加味した分析が求められる。

引用文献

神谷俊次(2003) 不随意記憶の機能に関する考察 心理学研究 74(5), 444-451.

Mace, J.H. (2007) *Involuntary memory*. Blackwell.

野村晴夫(2002) 高齢者の自己語りと自我同一性との関連 教育心理学研究 50 355 - 366.

野村晴夫(2008) 自己を語ることと想起すること 心理学評論 51 99-113.

※本研究は科研費(22730509, 25380877)の助成を受けた。